すばらしい海辺をいつまでも（改訂 2021）

―伊勢湾西海岸保護のしおり―

日本野鳥の会三重

（はじめに）

桑名市から伊勢市まで、伊勢湾の西海岸には自然の砂浜海岸が多く残されています。ここに注ぐ、安濃川、雲出川、櫛田川、宮川等の河口には広い干潟があります。さらに、北部の朝明川河口にも小規模ながら干潟があります。

伊勢湾は海の幸に恵まれ、カタクチイワシ、アジなどの魚類だけでなく、アサリ漁が盛んで、また干潟では青のりが養殖されています。

この海辺は多くの貴重な動植物の生息の場でもあります。シギ・チドリ、カモメ類、カモ類など多くの水鳥が訪れます。浜辺にはハマボウフウ、カワラナデシコなどの海岸植生のある場所も多くあります。アカウミガメも産卵に浜辺に上陸します。

このような自然の残る海辺は人口の密集した太平洋岸では稀なことです。私たちは、多くの方々にこの豊かな自然を知ってもらい、守ろうと思い、この冊子を作りました。

なお、この冊子は2013年２月に発行したものを大幅に改定したものです。

目　　次

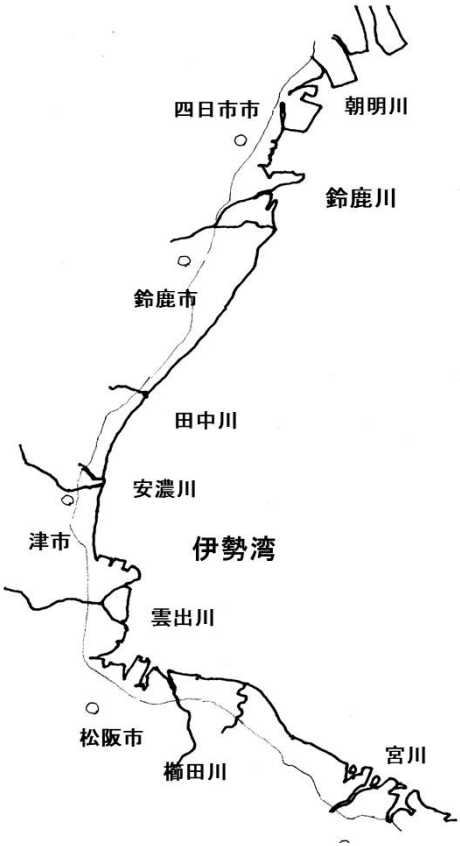
（はじめに） ---------- 1
伊勢湾西岸の注目すべき海岸 ---------- 3
高松海岸 ---------- 3
吉崎海岸 ---------- 3
鈴鹿川派川河口 ---------- 3
田中川河口干潟 ---------- 4
豊津浦・白塚海岸・町屋浦 ---------- 4
安濃川河口 ---------- 6
雲出川河口、五主海岸、阪内川河口 ---------- 7
金剛川河口、櫛田川河口 ---------- 9
北藤原、大淀、村松海岸 ---------- 11
宮川河口 ---------- 11
伊勢湾西岸での注目すべき鳥類 ---------- 12
ミヤコドリ ---------- 12
ズグロカモメ ---------- 13
シロチドリ ---------- 14
コクガン ---------- 14
コアジサシ ---------- 15
オオアジサシ ---------- 15
ミユビシギ ---------- 16
ヘラサギ類 ---------- 17
ミサゴ ---------- 18
カワウ ---------- 18
チュウヒ ---------- 19
(コラム) アカウミガメ ---------- 19
消えゆく鳥たち ---------- 20
カラフトアオアシシギ ---------- 20
ヘラシギ ---------- 21
すばらしい海辺を守るために ---------- 22
水鳥との共存 ---------- 22
地元の人たちの理解を ---------- 22
ラムサール条約に登録を ---------- 23
水鳥への脅威、太陽光発電 ---------- 23

鈴鹿川派川河口

伊勢湾西岸の注目すべき海岸

高松海岸

四日市港と川越火力発電所に囲まれた朝明川河口の比較的小規模な干潟です。以前から潮干狩りが盛んでした。近年バイパスの工事が行われましたが、干潟はかろうじて残されました。近年はミヤコドリが多数越冬するようになり、この干潟の重要性が認識されました。シギ・チドリ類も飛来しますが、あまり多くはありません。伊勢湾西海岸北部では貴重な干潟です。



吉崎海岸

磯津漁港の外側に残された小さな砂浜海岸。ハマゴウ、テリハノイバラなど海岸植生もあり、かつてはコアジサシが集団営巣したこともあります。シロチドリの繁殖の可能性もありますが、調査が行き届いていません。地元の団体が、清掃、外来植物駆除などを行っています。

鈴鹿川派側河口

派川河口には左岸からはりだした砂州があり、シギ･チドリ、サギ類などが飛来します。普段はめったに陸地に近づかないオオミズナギドリの群が派川河口付近でほぼ毎秋見られます。また、北側の鈴鹿川本流河口もサギ類など水鳥が訪れます。

アジサシの群　鈴鹿川派川河口にて

田中川河口干潟

田中川河口の右岸には、海には面していない小さな河口干潟があります。かつては両岸に干潟がありましたが、左岸側はヨットハーバーを作るために 1990 年代初頭に埋め立てられ、消滅してしまいました。残された右岸の干潟には葦原があり、夏にはオオヨシキリが繁殖します。コメツキカニなどカニ類が多く生息し、ハマサジなどの塩性植生があります。春秋にはハマシギ等のシギ・チドリも入りますが、あまり多くはありません。かつては付近の砂浜でシロチドリが繁殖しましたが、現在の繁殖状況は不明です。

豊津浦・白塚海岸・町屋浦

津市 田中川河口から志登茂川・安濃川河口まで、漁港などで中断されているとはいえ、約 10 km に及ぶ自然の砂浜海岸が残されています。海岸の奥行きも広く、海浜植生が豊富です。このような自然海岸は東京湾、大阪湾でも、また三河湾でも残されていません。その昔、浜辺はイワシを捕る地引網で賑わいました。かつては夏にシロチドリの繁殖が多数見られましたが、現在ではごくわずかになってしまいました。春秋にはユリカモメ、セグロカモメの大群が羽を休めます。ミユビシギ、ハマシギ、シロチドリの群もこの海岸を訪れます。この海岸の一部では、「白塚の浜を愛する会」がシロチドリ繁殖保護や海岸清掃の活動をしています。夏にはアカウミガメの産卵が見られます。

しかし、外来植物であるキミガヨランが海岸のあちこちに生育している他、本来海岸に生育しない樹木、草花が植えられている場所があり問題です。現在、堤防の拡充工事が行われていますが、これが終われば、海岸の自然を満喫できるようになるでしょう。

田中川河口干潟

ハマシギの飛翔

浜辺で休む
ミユビシギ (H. I.)

ハマダイコン

この海岸の魅力のひとつは豊かな海浜植生です。砂浜の奥行きが十分ある海岸では、春先にはハマダイコン、ハマエンドウが、夏にはハマゴウが咲きます。若い葉が刺し身のツマに使われるハマボウフウも至る所で見られます。また、白塚海岸では初夏にカワラナデシコが開花します。

満開のハマダイコン（町屋浦）

安濃川河口

津市市街地の河口。志登茂川河口と隣り合っています。冬には河口の砂州、干潟で、ミヤコドリが採餌、休憩します。また、ミユビシギ、ハマシギ、シロチドリも越冬し、群飛が見られます。冬には、オナガガモ、マガモなど各種のカモ類が多く、ウミアイサやホオジロガモが河口の間近で見られることもあります。沖にはスズガモの大群が浮かんでいます。ミサゴも時々訪れ、河口付近で見事なダイビングを披露してくれます。

右岸河口が野鳥観察のポイントで、近くに小さな駐車場があります。関西方面からもバードウォッチャーが訪れます。

ユリカモメの群

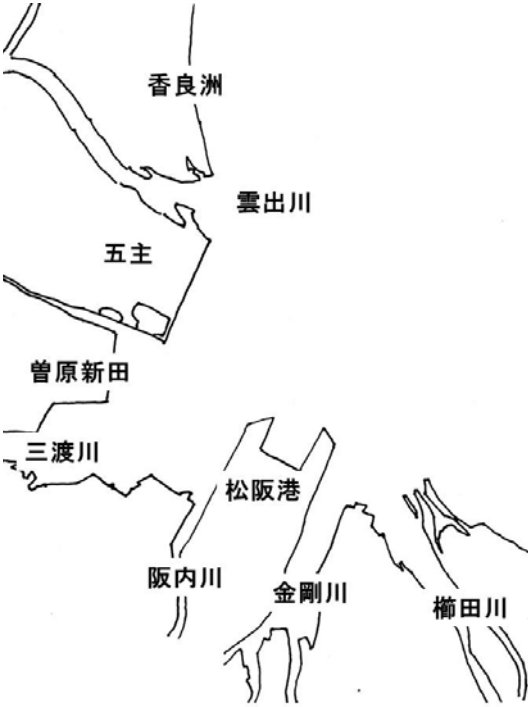
安濃川河口

河口沖合からドローンで撮影。右手にわずかに見えるのは志登茂川、中央は安濃川。左岸から砂州が張り出し、川は右岸側の細い水路となって流出します。砂州上に植生があり、シロチドリが繁殖します。

雲出川河口、五主海岸、阪内川河口

雲出川河口から阪内川河口までの海岸は伊勢湾西海岸の中でもシギ・チドリが最も多く見られる水辺です。種類の多さでは伊勢湾随一でしょう。沖には青のりの養殖が盛んな浅い海、五主干潟が、堤防の背後には水田が広がります。堤防より陸側にも細い水路や排水機場の遊水地があり、多くのシギが観察される県下屈指の探鳥地でしたが、太陽光発電（フロートソーラーパネル）のため、大半が失われました。それでも一部は残され、水鳥の貴重な棲家となっています。

ダイシャクシギ (M. I.)



春、堤防脇の水路にはツルシギが滞在し、徐々に黒い夏羽に変わってゆきます。越冬していたオオハシシギも赤茶色の夏羽に変化します。

干潟には様々なシギ・チドリが勢揃いします。チュウシャクシギ、キアシシギは大きな群で、またオオソリハシシギ、オグロシギなど大型なシギ、さらに大きなダイシャクシギやホウロクシギも少数ですが見られます。

背後の水田ではタカブシギ、ムナグロ、ウズラシギなどの淡水性のシギ・チドリが見られます。

春の渡りの群が去ると一時期干潟も寂しくなります。しかし、７月後半からはシロチドリの小群が現れ、８月には赤茶色の夏羽を残したミユビシギも飛来します。９月には再び干潟が賑わいます。

また、春秋だけでなく、越冬する鳥も多くいます。大きな群で越冬するハマシギの他、シロチドリ、ミヤコドリも群で越冬します。それに加え、ダイゼン、

アオアシシギ、オオハシシギ、タシギ、クサシギ等も越冬します。ダイシャクシギも少数ながら越冬する個体があります。海が豊かである証拠でしょう。

これまで、エリマキシギ、コアオアシシギ、ヨーロッパトウネン、オオメダイチドリ、カラフトアオアシシギ、ヘラシギ、シベリアオオハシシギなど稀な水鳥の記録も残されています。

オオソリハシシギ (M. I.)

アオアシシギ、ヨーロッパトウネン（中央のシギ)、トウネン、キアシシギ

シギ・チドリ以外では関東以西では珍しく、コクガンが少数ながら越冬します。秋にはオオアジサシも見られます。冬にはヒドリガモ、スズガモなど多くのカモが越冬します。

関西方面から、また名古屋からも多くのバードウォッチャーが訪れます。

金剛川・櫛田川河口

金剛川と櫛田川は隣接して伊勢湾に注いでいます。金剛川は小河川ですが、河口は広く、河口内に干潟が発達しています。そのためか干潟で採餌するズグロカモメが毎冬十数羽飛来し、越冬します。春秋にはダイゼン、メダイチドリ、チュウシャクシギ、アオアシシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、オオソリハシシギ、ハマシギなどシギ・チドリも数多く飛来します。ミヤコドリも時々飛来します。冬にはチュウヒが見られることもあります。

櫛田川は大河川で、河口は広く、がら崎と呼ばれる樹木に覆われた中洲があり、カモ類などがたくさん集まります。また、右岸側には松名瀬海水浴場があり、シーズンには賑わいます。高水敷には低木が茂り、ホオジロ類（ホオジロ、ホオアカ、カシラダカ）が生息し、またコホオアカの記録もあります。

ツルシギ

これらの河口堤防の陸側（堤内地）には水路や湿地、水田があり、ヒクイナ、バンなどの水鳥が見られます。また、葦原もあり夏にはオオヨシキリ、冬にはオオジュリンが飛来します。しかし、この数年で多くの葦原や水路が太陽光発電のために失われてしまい、鳥の種類も減ってしまいました。残念なことです。

ズグロカモメ（T. T.）

金剛川、櫛田川河口

河口沖合からドローンで撮影。右側が金剛川。干潮時には干潟が現れ、ズグロカモメが採餌します。中央の３本の腕を伸ばしているのは金剛川河口の砂州。左手は櫛田川。櫛田川の河口にも植生のある砂州がありますが、この写真には写っていません。

ハマボウの花（金剛川河口）

ハマボウはアオイ科の灌木。耐塩性があり、河口付近に生育し、夏に黄色い花を開きます。金剛川河口ではとりわけみごとです。

キアシシギ、ソリハシシギ

北藤原、大淀、村松海岸

櫛田川河口から宮川河口に至る海岸は堤防が波打ち際に迫り、海岸植生はほとんどありません。護岸堤が置かれている場所があり、冬にはカモメ類が羽を休めます。また、カモ類の他、ヒメウもよく見られます。

堤防より陸側には海岸林が所々に残されており、ホオジロ、ウグイスなどの小鳥類が見られます。また、海岸林に接して、広大な水田があり、渡りの時期は淡水性のシギ・チドリやサギ類が集まっています。

河川は、中ノ川、新川、祓川、笹笛川等小河川が流入しており、それぞれ淡水性のシギ・チドリが少ないながら見られます。

宮川河口

外城田川の河口に隣接し、大きな河口となっています。河口の砂州は護岸され、かつては耕作地、樫原新田でしたが、今は放棄されています。また、沖合にも大洲と呼ばれる砂州があります。外城田川河口の中洲も護岸され、かつては耕作とウナギ養殖に用いられていたようですが、今はここも利用はされていません。

冬季にはカモ類、ハマシギなど、多くの鳥類が訪れます。近年、コクガンが飛来しました。ミサゴは多く、また、チュウヒが数羽越冬します。夏はオオヨシキリが河口周囲の葦原で繁殖します。

宮川、外城田川河口はまだ鳥類の調査が行きとどいていません。

宮川河口

　河口沖合からドローンで撮影。河口には砂州があり、護岸され、かつて耕作されましたが、今は放棄されています。その砂州のさらに沖にも砂州があります。隣接する外城田川にも砂州がありますが、この写真には写っていません。

伊勢湾西岸での注目すべき鳥類

ミヤコドリ (M. I.)

ミヤコドリ
Eurasian Oystercatcher
(*Haematopus ostralegus*)

　白と黒の大型の水鳥。　シギ・チドリの仲間ですが、特殊で二枚貝を食べます。かつては珍しい鳥でしたが、近年増加し、毎冬約 150 羽が伊勢湾西岸で越冬し、砂州で採餌します。北は高松海岸から、西は金剛川河口までで見られます。日本野鳥の会三重では毎冬 3 回、一斉にカウントして、

砂州に群れる
ミヤコドリ
(M. I.)

越冬数を記録しています。この鳥は日本では東京湾、三番瀬とここ伊勢湾西岸でだけ見られ、他の海岸では見られてもごく稀で、個体数もわずかです。

東アジア太平洋西岸のルートに生息するミヤコドリは約 10,000 羽と推定され、その多くは韓国で越冬します。韓国の西海岸では繁殖も知られています。

2019 年にカムチャツカ半島で繁殖したミヤコドリ幼鳥 3 羽にフラッグがロシア人研究者によって付けられ、そのうち東京湾三番瀬と伊勢湾西岸に 1 羽ずつ飛来し、越冬しました。日本で越冬するミヤコドリの少なくとも一部はカムチャツカで繁殖することが分かりました。

ズグロカモメ
Saunders's Gull
(*Larus saundersi*)

中国渤海湾の湿地で繁殖し、日本、朝鮮半島、中国沿岸で越冬する小型のカモメ。成鳥の個体数 は IUCN(International Union for Conservation of Nature) によると 14,400 羽と推定されています。日本では九州に多く、伊勢湾は越冬地の東端になります。金剛川河口では毎年十数羽が越冬します。この鳥はユリカモメと酷似し、初心者には区別がつきにくいのですが、くちばしの色、翼の羽色などで、見分けられます。ユリカモメと異なり、干潟で採餌し、飛び方はユリカモメの飛び方よりやわらかです。

干潟で採餌するズグロカモメ

シロチドリ
Snowy Plover
(*Charadrius alexandrinus*)

砂浜海岸で繁殖する小さなチドリ。三重県の鳥に指定されています。春４月、海岸の砂地を少しくぼませて、卵を産み、温めます。ヒナは早熟で、生まれるとすぐ歩くことができ、親鳥に守られて海岸で過ごし、３週間ほどで飛べるようになります。

かつては豊津浦から町屋浦の砂浜で多数が繁殖していましたが、近年ではごく少数になってしまいました。その他、香良洲海岸、雲出川河口などでも繁殖が見られますが、わずかであり、毎年成功するとは限りません。三重県内伊勢湾岸以外では志摩半島でも少数の繁殖が見られます。越冬期は多くのシロチドリ個体がこの海岸に飛来し、越冬しますが、夏に繁殖する個体とは入れ替わっていると考えられます。

シロチドリ

コクガン
Brent Goose（*Branta bernicla*）

黒い小型のガン。マガンやヒシクイなど、他のガンと異なり、海辺に棲み、アマモや海藻を食べます。日本での主な越冬地は北海道、東北の太平洋岸です。伊勢湾西海岸では毎年数個体から10個体程度が越冬します。関東以南で毎年越冬する場所はここしかありません。安濃川河口から宮川河口までで見られます。東北以北で越冬する鳥が、なぜ遠く離れて三重に毎年訪れるのか分かりません。

コクガン（M. I.)

コアジサシ
Little Tern
(*Sterna albifrons*)

夏に日本を訪れ、繁殖する小型のアジサシ。本来は広い河原など、外敵が入らない場所で、大集団で繁殖する鳥。かつて四日市市 吉崎海岸で集団繁殖した記録があります。高度成長期には各地の埋立地などで集団繁殖していました。しかし、近年は集団繁殖に適した場所がなくなり、個体数は減少傾向であると考えられています。

伊勢湾西海岸では毎年のように数十羽程度で、各地の河口砂州などで繁殖を試みますが、カラス類に襲われ、あるいは営巣地が水没し、失敗します。ヒナが巣立ってもごくわずかです。日本各地で繁殖を誘引しようと取り組まれていますが、成功していません。

コアジサシ (M. I.)

オオアジサシ
Greater Crested Tern
(*Sterna bergii*)

オセアニア、インドネシア、インドシナ半島、インド洋沿岸などで繁殖し、南太平洋、インド洋で冬を過ごす大型のアジサシ。黄色いくちばしとボサボサの冠羽が特徴です。日本では各地で稀に見られるようです。五主海岸ではこの 10 年ほど、毎年、秋から冬にかけて、数羽が観察されています。

オオアジサシ (M. I.)

ミユビシギ
Sanderling
(*Calidris alba*)

砂浜の波打ち際をすばやく走り回り、甲殻類を捕食する小さなシギ。ハマシギと混群になる時もあります。東アジア飛行ルートのミユビシギはロシア北極海沿岸、タイミル半島やノヴォシビルスク諸島付近で繁殖し、10,000 km にも及ぶ長大な渡りをし、南はオーストラリアまで渡り、越冬する個体もあります。東アジア飛行ルートの個体数は22,000 羽と推定されています。豊津浦から町屋浦にかけての砂浜海岸では春秋の渡りに多く見られ、一部が越冬します。秋には顔や体に赤褐色の夏羽を残したミユビシギが見られます。この海岸では毎年 100 羽程度が越冬し、このシギにとって重要な海岸です。

ミユビシギの採餌

ミユビシギの飛翔 (H.I.)

ヘラサギ類

ヘラサギ類はサギとの名前が付いていますが、サギの仲間ではなく、どちらかというと、トキに近い水鳥です。

クロツラヘラサギ　Black-faced Spoonbill (*Platalea minor*) は朝鮮半島で繁殖する絶滅危惧種。日本では九州北部で越冬しますが、この海岸で記録されることがあります。

また、ヘラサギ　Eurasian Spoonbill (*Platalea leucorodia*) はユーラシア大陸に広く分布する水鳥ですが、日本では稀です。伊勢湾西海岸では毎年ではありませんが、記録されています。

クロツラヘラサギ

ミサゴ (M. I.)

ミサゴ
Osprey (*Pandion haliaetus*)

豪快に海に飛び込み、魚を捕るタカ。主に大きな魚を狙い、ダイビングは見応えがあります。伊勢湾西海岸では繁殖は知られていません。一方、三重県南部の海岸では繁殖していると考えられますが、確実な証拠はありません。安濃川河口、雲出川河口ではよく見られます。また、五主海岸では海苔ソダの上で休んでいるミサゴを見ることができます。宮川河口では特に多いようです。

カワウ　Great Cormorant
(*Phalacrocorax carbo*)

おなじみの黒い水鳥。海に潜り、魚を食べます。伊勢湾では非常に多く、河口付近の林や海岸に近い林で集団営巣します。定置網に潜って魚を取り、河川で鮎などを捕獲するので、嫌われています。三重県では鈴鹿市石垣池、津市雲出古川河口、伊勢市二つ池などに大きなコロニー（集団繁殖地）があります。近年はやや減少傾向ですが、県内で合計約 2,000 羽がカウントされています。一方、伊勢湾最奥の愛知県弥富野鳥園では巨大なコロニーがあり、約 10,000 羽が生息します。

カワウ

チュウヒ
Eastern Marsh Harrier
(*Circus spilonotus*)

葦原に生息するタカ。伊勢湾西海岸では主として越冬期に見られます。五主では太陽光発電のため葦原が消滅し、チュウヒを見る機会が著しく減りました。そのため、三渡川河口以北では、チュウヒが越冬できる環境はなくなったようです。宮川河口付近では毎冬数羽が越冬します。

チュウヒ

アカウミガメ
Loggerhead Sea Turtle
(*Caretta caretta*)

アカウミガメは太平洋、大西洋など世界の主要な海洋に生息します。三重県内では七里御浜、志摩半島と伊勢湾西海岸のいくつかの砂浜が、産卵場所です。5月下旬から8月中旬の夜間に砂浜に上陸し、穴を掘り、産卵します。約2ヶ月後、孵化した子ガメは地上に這い上がり、すぐに海に戻り、それ以降海で生活し、産卵以外に陸には上がりません。北アメリカ西海岸周辺まで回遊すると考えられています。

県内では「志摩半島野性動物研究会」などいくつかの団体がウミガメ保護活動を行っています。

ウミガメは上陸時、照明を嫌い、静かな環境でないと産卵しません。夏の夜、砂浜海岸へ入ることは慎みましょう

アカウミガメの上陸する砂浜海岸は私たちの誇りです。

産卵のために上陸したアカウミガメ（I. W.）

消えゆく鳥たち

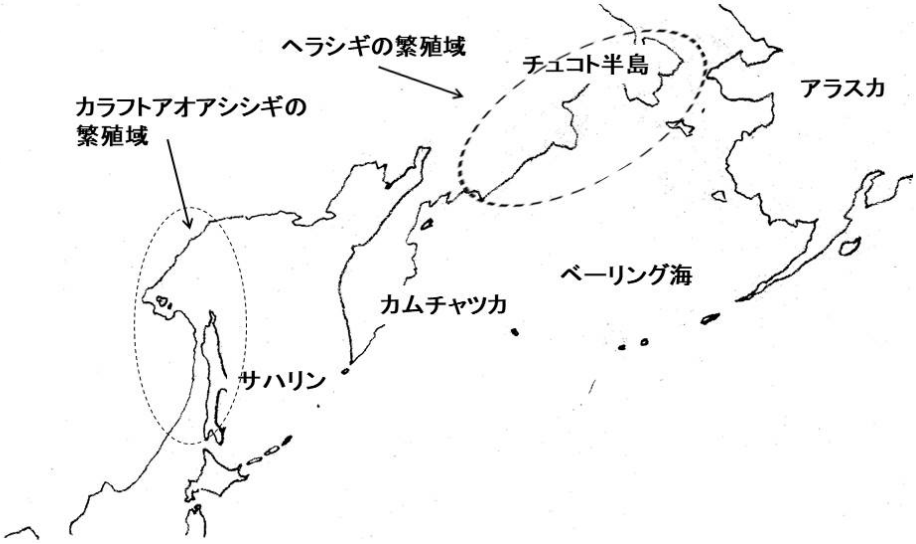
伊勢湾西岸で見られたシギで残念ながら、絶滅の崖っぷちにあるシギがいます。いずれもロシア極東部のごく限られた地域で繁殖する２種です。

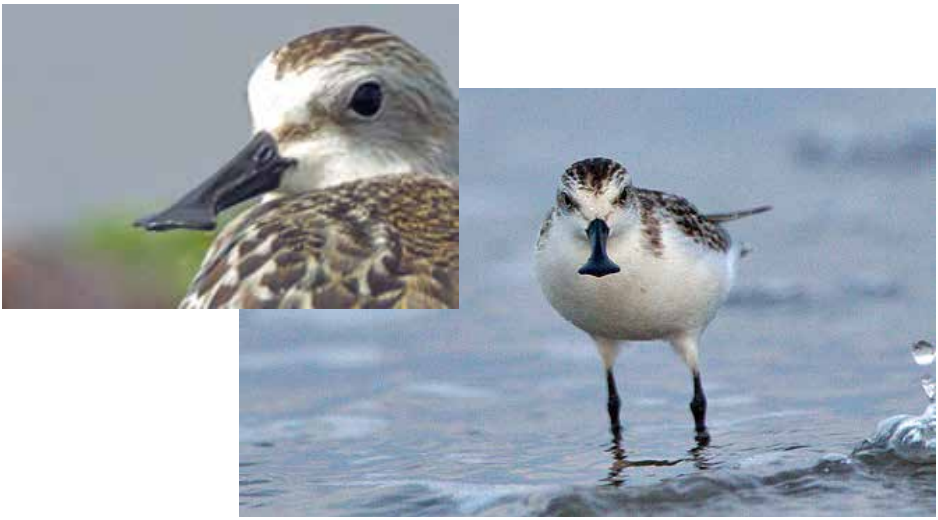
カラフトアオアシシギ　2018 年 9 月 16 日

カラフトアオアシシギ
Nordmann's Greenshank
(*Tringa guttifer*)

東アジアに生息する中型のシギ。アオアシシギによく似ています。サハリンおよび大陸オホーツク海東岸で繁殖し、マレー半島、スマトラ島などで越冬します。渡りの途中に日本、韓国、中国沿岸を通過します。IUCN によると全世界での推定生息個体数はわずか 600 羽から 1300 羽で、減少傾向にあるとされています。

三重県では古く 1953 年





ヘラシギ 上 2008 年 9 月 14 日
下 2006 年 8 月 24 日（M. I.）

9 月 8 日に伊勢市宮川河口で 1 羽が捕獲され剥製標本になっています。橋本太郎氏が採集と思われます。　それ以降は　1976 年 9 月 26 日に櫛田川湿田で記録がありますが、発見者は死去しており、詳細は判然としません。また、2002 年 9 月 5 日五主海岸で記録があります。近年では 2018 年 9 月 3 日に、雲出川河口で発見されています。

ヘラシギ

Spoon-billed Sandpiper

(*Calidris pygmaea*)

　くちばしの先端がヘラ状になっている小型のシギ。ユーラシア大陸東端のチュコト半島で繁殖し、中国南部、インドシナ半島沿岸で越冬します。近年極端に生息数が減っており、IUCN では全世界での生息数をわずかに 240 羽から 456 羽と推定していて、絶滅はもはや避けられないようです。日本での観察例も少なく、特に近年はごくわずかです。

　三重県では 1969. 年 9 月 22 日町屋海岸で、倉田 篤氏によって観察されています。それ以降、当会で確認できる記録は 2004 年 8 月 27 日 田中川河口干潟、2006 年 8 月 24 日 白塚海岸、2007 年 9 月 9 日　町屋海岸、2008 年 9 月 14 日　雲出川河口、2010 年 9 月 4 日　町屋海岸、2014 年 9 月 7 日 松阪市五主町雲出川河口であり、いずれも秋の渡りで幼鳥 1 羽が観察されています。 残念ながら、2014 年以降は見つかっていません。

すばらしい海辺を守るために

水鳥との共存

私たちの海辺での活動は、水鳥との共存を考えなくてはなりません。

干潟や河口で：水鳥は潮干狩りの人々には結構無頓着でも、カメラマンにはとても神経質です。カメラマンが水鳥に近づくことは彼らに脅威を与えます。むやみに砂州や干潟の上に下りたりせず、堤防の上から撮影しましょう。

砂浜海岸で：海岸で休んでいる鳥にむやみに近づいて飛ばさないでください。また、4月から6月はシロチドリ繁殖期です。シロチドリは砂浜海岸の砂地や草のまばらに生えた場所に産卵し、抱卵します。繁殖が疑われる場所で長く滞在しないなど、気をつけましょう。また、擬傷はヒナが近くにいる証拠です。擬傷を見たら、すぐにその場を離れましょう。シロチドリは大潮満潮時に冠水する場所では産卵しないので、波打ち際での釣りは長時間でも全く問題ありません。ただ、休憩する場合はシロチドリに気をつけましょう。

地元の人たちの理解を

この海辺は、残念ながら、地元ではほとんど注目されていません。海岸というと、潮干狩り、ヨットハーバーは注目されるのですが、何もない自然の海岸は少数の釣り人と近隣の人たちが散歩に入るくらいであり、地元の自治体もほとんど注目していないのが現状です。鈴鹿市から津市にかけての海岸は「伊勢の海県立自然公園」になっていますが、それすら知る人はほとんどいません。私たちのすぐ近くにあるこ

浜辺に飛来したハマシギの群 (H. I.)

の海辺のすばらしさを地元の人たちに知ってもらい、守ってもらうことが必要です。

ラムサール条約に登録を

ラムサール条約は世界の湿地の自然を守るための国際条約で、日本も加盟し、条約に登録された湿地は国内に数多くあります。近県では琵琶湖、名古屋の藤前干潟などがあります。残念ながら三重県ではひとつもありません。ここで紹介した水辺のいくつか、特に津市、松阪市の海岸部分はこの条約に登録する価値があります。

この条約ではワイズユース (Wise use) という考え方があり、大規模な埋め立てや開発などを伴わない、従来どおりの農業や漁業と湿地・水鳥の保護は両立するものであると考えています。このすばらしい海辺をぜひラムサール条約湿地に加えたいものです。

環境省の基準では、登録する湿地は、国が直接保護に関与している、国立公園、国定公園、国設鳥獣保護区などであることが必要とのことです。この地域をまず、国設鳥獣保護区に指定することが第一歩でしょう。

水鳥への脅威、太陽光発電

近年、海岸部に太陽光発電が数多く建設されました。水面にフロートを浮かべ、あるいは、葦原や養魚池跡を埋め立ててパネルを並べるなどされています。これまで水辺の鳥が利用していた場所が次々と狭められています。五主海岸ではセイタカシギが繁殖した水路にパネルが並べられ、さらに、チュウヒの越冬する葦原が消滅しました。パネルの設置は土地所有者の一存で決まり、自然に配慮した形跡はほとんどありません。自然保護の観点からこれを規制する法律、条例はほとんどありません。無秩序な太陽光発電設置をなんとか規制し、水鳥の生息地を守りたいものです。

海苔ソダの立ち並ぶ海（五主海岸）

堤防脇の水路を訪れたアオアシシギ、
セイタカシギ、ツルシギの一群（H. I)

謝辞

このパンフレットを作成するにあたり、次の方々より、情報、ご示唆をいただきました。お礼申し上げます。今井光昌、中村みつ子、西口恵子、若林郁夫（敬称略、五十音順）

また、写真は著者が撮影したもの以外にも、次の方々から提供を受けたものです。写真のキャプションにはイニシャルで表示してあります。石原宏 (H. I.)、今井光昌 (M.I.) 、田中豊成（T. T.)、若林郁夫（I. W.）（敬称略、五十音順)。また発行にあたり、公益信託サントリー世界愛鳥基金助成事業による資金を利用しました。お礼申し上げます。

すばらしい海辺をいつまでも
（改訂 2021）
2021 年 12 月 1 日発行
著　者：平井 正志、西村 四郎、
笹間 俊秋、三曽田 明
発行者：平井正志
発行所：日本野鳥の会三重
〒 514-2325
津市安濃町田端上野 910-49
ホームページ　http://miebird.org/
印　刷：株式会社プリントパック
〒 617-0003　京都府向日市

公益信託サントリー世界愛鳥基金助成事業